

沿革

当屋敷は、江戸時代、村田城(とうじろ)に仕える武士が居住していたところである。慶応2年(1866)の村田城周辺を描いたとされる『居屋敷並家中屋敷絵図面(写)』には、当屋敷に当たる場所には「侍屋敷 鳥羽喜右衛門屋敷二佐藤利作」と記されている。慶応2年は、ちょうど芝多家から片平家へと領主が交替した年であり、芝多家中である鳥羽氏の屋敷に、加美郡谷地森村(現加美町の一部)から領主と共に移転してきた、片平家の佐藤氏が入れ替わったことを記している。鳥羽氏の詳細は明らかではないが、身分は小姓組、知行高は一貫文(10石)で、芝多家中では中位に位置した。移入時の文書によると、佐藤氏は、御家中一統52名の内5番目に記される上位の家中だった。ちなみに、その文書には「佐藤藤佐」の名が記されているが、前出の絵図には「佐藤利作」となっており、移入を機に代替わりしたと思われる。公簿によると、明治20年(1887)までは佐藤利作氏の名義であることが記録されているが、明治38年(1905)に、屋敷は、商家の系統である田山孫八氏(3代目)の所有となった。

田山孫八氏は明治3年(1870)に村田で生まれ、村田町長(第4代:明治40年8月~大正12年8月在任)、町議会議員、宮城県議会議員、そして、城南軌道社長(創立時)などを歴任した人物である。海洋地質学者として著名な田山利三郎氏は、孫八氏の三男であり、当屋敷で少年時代を過ごした。孫八氏長男の利右衛門氏は医師となり、大正時代から戦後頃まで当屋敷の南側に診療所を開業していた。長年にわたり田山家が居住してきたが、主屋及び土蔵は、平成6年(1994)5月に田山家より町に寄贈された。

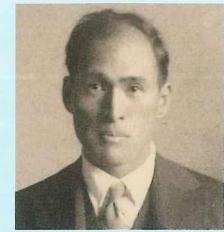
村田における武家屋敷の家屋は建て替えが進み、住宅遺構が現存するものは当屋敷のみである。当屋敷は、後世の改変が多いものの、村田に武家屋敷があつたことを示す唯一の遺構であり、村田城下及び周辺在郷町の武士住宅の面影を伝える貴重な存在である。その価値が認められ、平成6年8月2日、村田町の文化財(史跡)に指定された。

『居屋敷並家中屋敷絵図面(写)』
下:全体／右上:拡大



田山利三郎博士について

田山利三郎博士は、我が国の海底地形・地質学研究の草分けとも言える海洋地形学者である。田山博士は、田山孫八・かよの三男として、明治30年(1897)に当屋敷で生まれた。村田尋常小学校を卒業後は、大河原高等小学校、宮城県師範学校を経て、一旦小学校教師となった。その後、東京高等師範学校を卒業し、札幌中学校教師となった。向学心は留まらず、更に東北帝国大学(現東北大学)理学部に進学し、地質古生物学教室にて学問を探求した。昭和12年(1937)に、理学部助教授の傍ら、南洋岸熱帯産業研究所の技師となり南洋諸島の地質・珊瑚礁の研究に取り組んだ。時として、母校である村田小学校を訪れ、南洋のみやげ話を子どもたちにしてくれたと言う。戦後は、東北大学教授と海上保安庁水路部測量課長を併任し、研究を続けた。



34歳頃の田山利三郎博士

昭和27年(1952)9月23日、博士らを乗せた海上保安庁の調査船「第五海洋丸」は、東京都八丈島の南約120kmに位置する明神礁海底火山の調査のため、横浜港を出発した。翌24日20時頃、海底火山が爆発し、船は消息を絶った。田山博士を団長とする調査団の31名全員が、船と運命を共にしたのである。田山博士は、享年55歳だった。

生前の田山博士は、仙台市街地を流れる広瀬川の段丘区分に関する研究、海底地形の分類や形成に関する研究、そして、海底拡大説の基となった『日本近海深浅図』の編集など、海底地形・地質学上、重要な業績を数多く残した。その功績を讃えて、田山博士の名を冠した海底地形が、津軽海峡(田山海峠)と南鳥島南東方(田山平頂海山)に存在する。

交通のご案内

所在地: 宮城県柴田郡村田町大字村田字西66



自動車利用

東北自動車道 村田ICより東へ3分

ミヤコーホームバス利用

〈仙台市内から〉
仙台駅西口・旧さくら野百貨店前
33番のりば「仙台・蔵王町線」乗車
約40分→「村田町役場前」下車すぐ

JR東北本線利用

JR「大河原駅」下車→
ミヤコーバス「村田・川崎行き」乗車
約20分→「村田中央」下車→徒歩
約5分

編集・発行/令和2年3月

村田町教育委員会 村田町歴史みらい館

〒989-1305 宮城県柴田郡村田町大字村田字迫85

電話 0224-83-6822

村田町指定史跡

武家屋敷(旧田山家)

